



としての風景を描いた宗教画・肖像画、風景そのものを描いた風景画（理想化された風景画、史実的客観的風景画、印象的主観的風景画）なども、その背後にある自然・文化をめぐる意識を探る、貴重な手がかりになる。

集合的記憶の場としての、従って非文字資料としての地域と風景は、それらの資料自体が、時と共に、そしてそこに生きる人々と共に変化する性質をもつ資料である。

6 非文字資料の総合された領域

視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚、身体感覚（身体の清潔、着衣と裸体・羞恥、坐り心地、寝心地、身体技法と道具、住居空間）それらの総合された感覚環境のなかに、人間は生きている。感性の総合された結果としての好悪、何を快く、何を気持ち悪いと感じるかの文化による違いは、文化

の基層の性格づけに大きな役割をもっていると思われる。その際、異なる感覚領域間の連合、共感覚 (synesthesia) に注目することが大切であろう。非文字媒体による記憶は、primordial attachment (C. Geertz)「原初的愛着」形成に重要な役割を果たすのではないか。「何を快く、何を気持ち悪いと感じるか」とくに後者の、反射的忌避感覚は文化の性格を深層で方向づける意味をもっているであろう。

嗅覚については、生理学的研究がまだ不十分だが、感覚に与える印象が、漠然としているからこそ、記憶や連想を喚起する力は大きいといえる。香水・香油文化が、日本ではなぜ乏しかったのか、人類諸文化での潔・不潔感の問題、匂いと宗教の関係、神仏との交信の予備的行為としての香料の問題など、この領域でなすべきことは大きい。

研究会報告

S C I E N C E R E P O R T

民具という非文字資料から日本列島の古代多民族社会を復原する試み

河野 通明（神奈川大学日本常民文化研究所・教授）

1 「日本」そのものを研究対象とすることの重要性

COEプログラムでは「人類文化研究のための非文字資料の体系化」を掲げ、2班では日本・東アジア・ヨーロッパ・アフリカの現地調査をして身体技法の比較研究をすることとしているが、この比較対象とされている日本は、古くからの「東と西」論や近年の東北学の提唱に見られるように実に多様であり、この多様性の根源を探ればおそらくそこに住んでいる人々の民族的系譜が異なるからである。したがってこれまで大工や鍛冶の仕事などについて中国では立って仕事をするのに対して日本ではお尻を地面に付けて胡座で仕事をする指摘されているが、この日本は座位といった場合の「日本」とは絵画資料に記録されやすい中世・近世の首都＝京都近辺のことであって、東北地方や九州ではどうであったが確認されているわけではない。少なくとも靱搦臼の操作については畿内では座位であるが近世の加賀では立位であり、これはさかのぼれば民族の違いに起因する可能性が高いとわたしは見ている。この事実はこれまで知られていなかったし、そういった研究関心はあまり示されてこなかった。しかし畿内と加賀で作業姿勢＝身体技法が異なるとなると、外国と日本を比較する場合、その日本として選んだ

対象の地域の住民は民族的には何系に属するかが問われなければならないし、同時に日本の他地域ではどうかという調査も必要となってくる。しかしながら日本とアフリカの比較といった取り組みにそこまで期待するのは時間的にも調査の手順からも無理なことは明らかで、これは日本と外国との比較をおこなう一方で、同時並行で日本そのものも多様性を研究するのが必要だということであり、そこから新たな展望が開けてくるのであろう。

2 日本列島の民族的多様性

日本の歴史、より厳密には日本列島で展開されてきた人類の歴史を模式的にまとめれば、原住民としての縄文系狩猟採集民の世界に外から稲作民が侵入してきた。かれらは稲作の生産力の高さから人口を急激に増やし勢力を伸ばし、やがて統一国家を形成して先住民に言葉や文化を押しつけて同化を迫った。この点では日本の歴史は分かりやすくいえばアメリカ合衆国型であり、ただこの過程が島国という環境で2000余年という長い時間をかけて進行し、かつ先住民も侵入者も同じモンゴロイドであったために、明治初年の段階で北海道を除けば単一言語の単一民族的様相を呈していたに過ぎない。したがって過

去にさかのぼって日本の文化を論じるなら、そもそもの地域にどんな民族が住んでいたかという時代ごとの民族分布図が明らかにされねばならないし、同一地方に複数の民族が住んでいる場合には仲良く棲み分けていたのか、あるいは上下関係でカースト的身分制を作っていたのが問題となる。さらに古墳時代の統一、律令国家による統一といった時代の大きな節目ごとに文化・技術の伝播や政策的移転はどうだったのかとか、日本語化＝民族語の喪失はどの時点でどういう事情でどの階層までどの程度に及んだのが研究課題となる。ところが科学的歴史学を標榜していた戦後歴史学は、階級関係の検出と社会構造の把握には関心を寄せたが、いまいった民族問題を歴史のなかでどう明らかにし、通史のなかに位置づけていくかについては論理の構造として抜けていたように思われる。それはなぜか。

3 文献史学に必然的に生じる死角

戦後歴史学が多民族史に無関心だったことについては、その拠り所とした唯物史観が階級関係の展開から将来の社会主義社会・共産主義社会を展望することに関心が向けられ、万国の労働者よ団結せよという国際主義のスローガンが民族の多様性に目をふさがせたことに大きな原因があることには間違いない。だがもう一点、日本の歴史研究がもっぱら文献史料に寄りかかって進められ、実態は「文献史学」に過ぎないにもかかわらず「歴史学」と自認して歴史研究全体をカバーしているような錯覚に陥っていた点も大きかったのではないかと思う。人が生きたなかで文字に記録されるのはほんの一部に過ぎない。しかしそれ以上に文字に記録される頻度と民族文化の多様性とは時代の推移のなかでは反比例的關係にあることが注目される。文字による体系的記録は8世紀の『古事記』『日本書紀』が最初であるが、その後時代の下につれて幾何級数的に増加し識字階層も庶民にまで降りてくる。それに対して民族文化の方は時代の進むにつれ同化が進行し、その多様性は失われていく。それでも東北地方や北海道に固有文化が色濃く残っていたのを庶民階層の菅江真澄は絵と文で記録したわけであるが、文字記録の限界を超えた古墳時代では多様性はもっと強烈かつ普遍的で、日本列島はアフガニスタンのような多民族で多言語の社会であったに違いない。それに加えて中国から文字体系を導入したのは支配民族の稲作民であって狩猟採集民は文字をもたなかったこと、また時代をさかのぼれば文字記録は天皇や貴族の、政治や外交関係の事件性のあ

る事柄に限られるのに対して、民族の多様性は庶民階層の日常的な生活場面に色濃く現れるという特質がある。したがって文字資料に頼っている限り民族文化の多様性はほとんど死角となって研究者の目に触れなくなる。郷土史好きのアマチュア研究者が想像の羽根をのぼして古代のロマンに酔いしれるのに対して、プロの研究者は史料に現れないものは自戒して語ろうとしない。それ自身は歴史学が科学であるための要件として大事なことではあるが、それを続けていくうちに史料に現れないものには関心を向けないという傾向が生じることも否めないであろう。この文字資料の死角で見えない部分については物証に依るしかない。警察は犯人捜査にあたって文字資料に頼っているわけではなく、物証を重視し鑑識班が活躍して犯人の特定に成果をあげている。われわれの歴史学も文献史学の殻を破って物証からの歴史学へ大きく踏み出す時ではないか。その意味でCOEプログラムが「非文字資料の体系化」を看板に掲げた意味は大きい。

4 民具＝非文字資料の最たるもの

非文字資料というと絵画資料が頭に浮かぶが、絵は描き手が意図をもって何らかのメッセージを表そうとしている点で文字に近い。そもそも文字そのものが絵文字から出発したことからわかるように文字と絵画資料は兄弟関係にあり、平面に記された二次元資料という点でも同類に属する。したがって絵画資料は非文字資料のなかでも「準」文字資料というべきものだろう。それに対して各地の博物館・資料館に収集された民具は、人類が生きるために作りだした道具そのものであり、文字や絵画のようにメッセージの表現ではないという点で、これこそ「非」文字資料というべきであろう。民具はその形からは何に使ったという用途や性能、作業姿勢、伝来の系譜、その地に伝来後に加えられた改良などの情報が引き出せるし、呼称からは伝来の時期・伝来事情と系譜、加工技術からは流通品か手作りかの区別、作り手の民族の読み分けなどが可能となる。その内包する情報の豊かさは絵画資料の比ではなく、非文字資料の最たるものといえよう。資料館収蔵庫の民具調査を20余年続けているが、これこそ文献史料の見えない部分を補う歴史資料として有効であるという確信を、近年ますます強めている。

5 民具の全国比較から多民族社会復原は可能

日本が多民族社会であったと述べてきたが、どういう民族がどう住み分けていたかについての見通しを述べて



おこ。縄文系狩猟採集民のいた列島に弥生時代になってまず朝鮮系稲作民が渡来し、遅れて中国少数民族系稲作民が渡来した。前者は田植えをやっていなかった可能性が高く、穀物は穴蔵に保管するという畑作寄りの稲作をおこなっていたと思われる。それに対して中国少数民族系稲作民は早乙女が田植えをし、高床式倉庫に稲を保管する人達で、床張り住居やいろり、曲物もかれらが持ち込んだ可能性が高い。そして民族紛争の倭国の大乱を経た3世紀の卑弥呼の統一期に日本列島の民族の住み分けは一応確定するものと思われる。その後5～7世紀に朝鮮系渡来人の流入があり、8～9世紀には東北地方南部で城柵の建設にともなって関東・中部の農民が柵戸として入植するが、それ以降は民族分布に大きな攪乱はない。各

地の資料館にはそれぞれの地域の民族が使い伝えた民具が収集されているのである。といっても収蔵庫にある民具の多くは大正・昭和期に製作されたもので古代のものがそのままあるわけではない。しかしながら伝統的民具は壊れると元の形で更新されるので、大正・昭和の民具にも古代以来の形質は継承されている。しかも古い時代の文字資料は中央に限られるのに対して、民具は全国各地にでもある。したがって各地の資料館の全域調査を実施して広域に比較検討すれば、文字資料では死角となっていた日本列島の多民族状況が彩りゆたかに復原できるであろう。いま東北地方から全県調査を始めただけだが、木摺臼の作業姿勢などに興味深い成果が出始めている。それらは報告書にまとめることとしたい。

主な研究活動

全体会議

プロジェクトが発足して数カ月が経ち、事務局体制も次第に整い、現地調査を踏まえたもの、体系化に関する理論など、研究発表に対する質疑応答も活発に行われている。今後のプロジェクトの方向性も少しずつ見出されるようになってきた。

第5回 12月5日（於：横浜キャンパス1号館 804会議室）



研究会

全体

河野 通明（12月5日）

身体技法・感性を手掛かりとした古代日本列島の多民族状況の検出の模索

班

三鬼 清一郎（11月11日・3班）

倭城・倭館・合戦図 朝鮮半島における日本関係建造物をめぐって

須山 聡（11月11日・3班）

渋沢敬三のまなざし

香月 洋一郎（11月11日・3班）

方法としての景観に向けて

金 貞我（12月5日・1班）

『日本常民生活絵引』英語訳の試みとその問題点

富井 正憲（12月16日・3班）

漢城・京城・ソウル 南山を中心として

八久保厚志（12月16日・3班）

景観変化に関する地理学的分析と分析手法についての研究（案・構想）
アチック・ミュージアムに残された景観資料を起点として

